

物部氏の拠点集落

―布留遺跡―

日野 宏

【目次】

第1章 石上神宮と布留遺跡……………4

- 1 大和の要衝、布留……………4
- 2 石上神宮と物部氏……………8
- 3 石上神宮の禁足地のまつり……………11

第2章 布留のまつり……………17

- 1 布留川北岸地域のまつり……………17
- 2 布留川南岸地域のまつり……………31

第3章 物部連氏の台頭……………38

- 1 豪族居館……………38
- 2 巨大倉庫……………40
- 3 物部連氏の武装……………48
- 4 「石上溝」の掘削……………51

第4章 布留の生産体制……………58

- 1 工房に関連する竪穴建物群……………58
- 2 天理砂岩……………61
- 3 玉作り……………65
- 4 鉄器生産……………68
- 5 布留の渡来人と工人集団……………70
- 6 工人の築いた群集墳―赤坂古墳群……………75

第5章 その後の物部連氏……………79

- 1 王権の中核で活躍する物部連氏……………79
- 2 国内屈指の終末期古墳と火葬墓……………80
- 3 布留遺跡の今後の課題……………89

主要参考文献……………91

編集委員

勅使河原彰(代表)

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

第1章 石上神宮と布留遺跡

1 大和の要衝、布留

布留遺跡は、大和高原に源を発する布留川が盆地部へ流れ出す谷口付近の、布留川によって形成された右岸の扇状地上、および左岸の河岸段丘上に広がる、東西二・〇キロ、南北一・五キロの広さの旧石器から近世にいたる複合遺跡だ(図1・2)。本書では、現在の行政区画では天理市の杣之内・守目堂・豊井・布留などの各町にまたがって布留遺跡が所在する地域を「布留」とよぼう。

この布留の東部には、奈良盆地東縁の山裾を桜井から布留を通り、奈良に向かう山辺の道が南北にはしる。この道は、『古事記』崇神天皇条には「御陵は山辺の道の勾の岡の上に在り」と記され、また景行天皇条にも「御陵は山辺の道の上に在り」とあって、古くから存在した幹道であった。また、『日本書紀』の武烈天皇即位前紀には乃楽山(平城山丘陵)で討たれた



図1・布留遺跡全景(南上空より)

写真中央、東の山塊から盆地に流れ出した布留川が形成した扇状地上に市街地が広がっている様子がわかる。布留遺跡はこの扇頂から扇中部、南岸の河岸段丘上に広がる。

この歌から、桜井からのびていた古道が布留を過ぎて、さらに高橋、大宅、春日、小佐保を過ぎて、乃楽山へと通じていたことを知ることができる。

また、布留川は伊勢・伊賀に通じる重要なルートとなっていることが和田萃によって指摘されている。布留川をさかのぼると天理市福住を経て、奈良市都祁にいたる。都祁には、古墳時代中期から後期にかけての三陵墓古墳群があり、中期には三陵墓西古墳や三陵墓東古墳が相前後して築かれている。三陵墓西古墳は、直径四〇メートルの大型円墳で全長八・四メートルの長大な割竹形木棺を埋葬施設とし、三陵墓東古墳は全長一〇〇メートルを超える前方後円墳で、古墳時代中期に大きな勢力がここにいったことがわかる。

布留遺跡は布留川のルートを通じて、都祁の勢力ともつながり、さらには伊賀・伊勢へとも通じ、奈良盆地のみならず、東の勢力とも通じる交通の要衝に位置していたのである。

平群鮪を慕う物部麿鹿火の娘、影媛悲哀の歌が載せられている。

石の上 布留を過ぎて 薦枕 高橋過ぎ 物多に 大宅過ぎ 春日 春日を過ぎ 妻隠る小
佐保を過ぎ 玉笥には 飯さへ盛り 玉盃に 水さへ盛り 泣き沾ち行くも 影媛あはれ

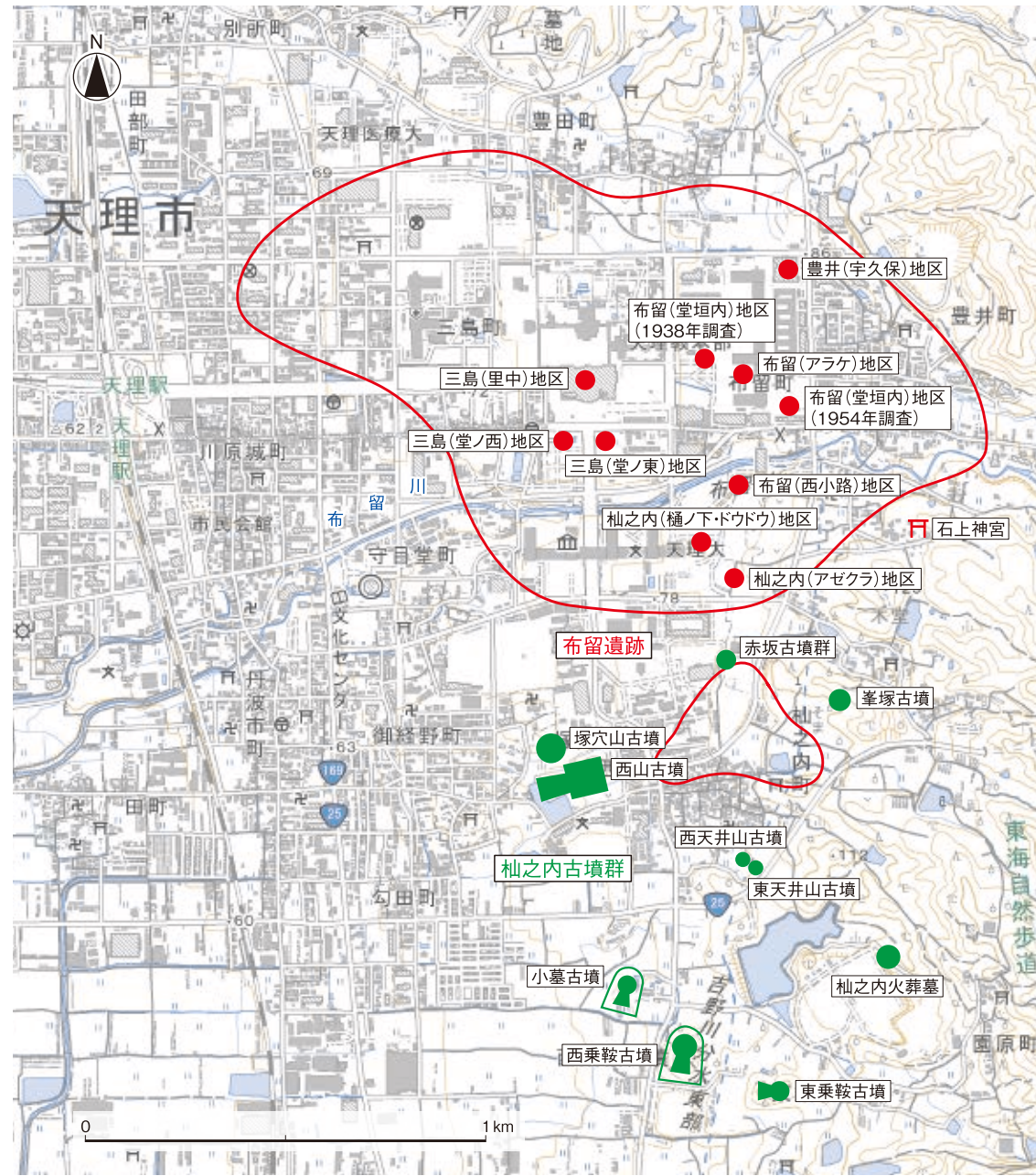


図2 ● 布留遺跡の調査区と杣之内古墳群
東西2 km、南北1.5 kmの大きさの布留遺跡の南には、この地を治めた首長の奥津城である杣之内古墳群が隣接する。

2 石上神宮と物部氏

『古事記』『日本書紀』のなかの石上神宮

布留遺跡の東縁には石上神宮が鎮座する(図3右)。布留遺跡は物部氏が拠点を置いた遺跡として知られているが、両者の関係はこの石上神宮の存在を抜きにしては語るができない。また、石上神宮はヤマト王権と深いかかわりをもつ神宮でもあった。『古事記』『日本書紀』の語る石上神宮と物部氏の関係についてみてみよう。

石上神宮は、フツノミタマを祭神とし、古くより物部氏によってまつられてきたとされる。このフツノミタマについては『古事記』中巻神武天皇条に、神武天皇が日向より東征して熊野に入ったときに、大熊があらわれ、その毒気にあたり神武天皇の軍は倒れるが、天照大神によって天より「横刀」が遣わされ、その靈威により神武天皇の軍は勝利したとされる。この横刀はフツノミタマとよばれ、「石上神宮に坐す」とある。『日本書紀』神武天皇即位前紀戊午年六月条にも同じような話が載せられている。

ここで述べられているように石上神宮の祭神、フツノミタマは武器神であった。

王権の武器庫としての石上神宮

また、『古事記』中巻垂仁天皇条に印色入日子命が横刀一千口をつくり、石上神宮に納め、それを管理したことが記されていて、石上神宮の武器庫としての性格を読みとることができる。

『日本書紀』垂仁天皇三十九年一〇月条にも同様の記事がある。石上神宮には六一文字の銘文が表裏両面に金象嵌された有名な七支刀が納められている(図3左)。これは、後で述べる石上神宮の信仰の対象となっていた禁足地から出土したものでなく、五世紀に製作されたとみられる鉄盾などとともに、長年にわたり神宮に伝世してきたものである。

吉田晶の訳によれば、表には「泰和四年(三六九)十一月十六日、刀剣を造るのによい日と時刻をえらんで、よく鍛えた鉄で七支刀を造った。この刀はあらゆる兵器による災害を避けることができ、礼儀正しい侯王が所持するのに相応しいものである」と刻まれ、裏には「いままで、このような刀はなかった。百済王(近肖古王)の世子(近仇首王)は、神明の加護を受けて現在に至っている。そこで倭王の為にこの刀を精巧につくらせた。刀が末長く後世に伝



図3・石上神宮の七支刀(左)と石上神宮拜殿(右)

左の百済から贈られた七支刀には、61文字の銘文が表裏面に金象嵌であらわされていた。拜殿の後ろには禁足地がある。

えられることを期待する」と刻まれている。

東晋の泰和四年の金象嵌銘をもつ七支刀は、百済から倭国の王に送られものであった。この七支刀の伝世は、石上神宮の王権の武器庫としての性格を如実に物語っている。

物部首と物部連

石上神宮と物部氏との関係については『日本書紀』に二つの話が載っている。

『日本書紀』垂仁天皇八七年二月条には、劍一千口を石上神宮に納め、それを管理していた五十瓊敷命が年をとったので、その管理を妹の大中姫に譲ろうとしたが、大中姫はそれを辞退して物部十千根大連にゆだねたこと、そして、それ以降、物部連等が石上神宮の神宝を管理したことが記されている。

また、『日本書紀』垂仁紀の一伝に、五十瓊敷命のつくった大刀一千口は最初、忍坂邑に納めたのち、そこから移されて石上神宮におさめられたと記されている。その際、神の乞いによって春日臣の族で市河という者に管理させた。これが物部首の始祖だというのである。ここには石上神宮の創祀について、物部連と物部首の二つの記事がみえる。

津田左右吉は『新撰姓氏録』の布留宿禰(のちの物部首)が、石上の地に古くから住んでいた土着の豪族で、のちに武臣として勢力をもっていた物部連が乗り込んできて布留宿禰を部下にしたために、『日本書紀』に両氏の石上神宮創始の由来譚が採録され、二つの記事となったとする。

松前健は、祭祀の変遷とそれにもなう神話伝承の分析や考古学的徴証から津田説を支持している。

この時代、『古事記』には住吉仲皇子の乱の際に、履中天皇が石上神宮に逃げ込んだという記事があり、『日本書紀』履中天皇四年条には「石上溝」を掘るといふ記事がある。また、雄略天皇と皇位をあらそう地位にいて殺された履中天皇の皇子の市辺押磐皇子がこの地に宮をおいていたらしいことなどから、この地がヤマト政権にとって非常に重要な場所であったことがうかがえる。

松前は、この時期に台頭する物部連氏がヤマト政権の軍事・警察権を掌握し、地方鎮定事業にたずさわり、各地の豪族の神宝をとり上げ、石上神宮の庫におさめて管理するようになり、土着の豪族の布留宿禰氏の祭祀権を掌握したとする。そして、それまでおこなわれていた単なる川辺の祭祀を天皇の御寿の長久を祈る鎮魂的な祭祀として、川岸より高い現在の社地辺の祭場でおこなうようになったとし、祭祀法が決定的に変革したのは、五世紀後半以降の物部連氏の台頭によるものであるとしている。

3 石上神宮の禁足地のまつり

菅政友の発掘調査

石上神宮は桜井市の大神神社と同様に社殿をもたないことが大きな特徴としてあげられる。